

ユング心理学はどう日本で進化したか

山中 康裕

日本のユング心理学は、すでに昭和6年に中村古峽によって紹介されたのが嚆矢であるが、昭和35年ごろの高橋義孝らの紹介は、Jungの根本思想にふれるものではなかった。1967年の河合隼雄によって、ユング思想の本格的な移植が開始されたといつてよい。Jung以降の、ほとんどのユング派学者は、西洋では、Neuman, E., Guggenbühl-Craig, A., Kalf, D. M., Spiegelman, M., Meier, C. A., Hillman, J.そして、Giegerich, W.らほんの少数を除いて、全くJungを超えていないが、日本の河合は『明恵 夢を生きる』で、一定程度の深化と進展をみせたが、その仏教理解は、鈴木大拙の『禅仏教入門』以上に出るものではなかった。つまり、禅も真(浄土真宗)も、仏教一般の中に埋没して抽象化された分、汎化したか、深化はなかった。著者は、Jungを日本に導入するにあたって、例えば、JungのいうSynchronizitätを、河合は「共時性」と訳したが、著者は「縁起律」とし、これは、いわゆる因果律と真つ向から対立する理論体系と考えた。仏教の縁起論は、因果論を内包する体系であり、著者のいう「縁起律」とは、異なる概念である。また、華嚴経を写経し、パリ郊外ペレバでの第2回国際華嚴経学会に出席して、このインドに発し、中国で深化した思想が、先の縁起律と相俟って、その世界観の延長上に、Jungを超えていく、東洋的叡智の成果と考えた。さらに、浄土教の深化による親鸞によって洞察された阿弥陀佛と、先の華嚴経の毘盧遮那佛とは、2世紀から4世紀の中国思想によって、もともと釈迦によって思念されたものが、³「抽象佛」として結晶化したものであり、つまり、毘盧遮那佛を、万物生成の根源たる《昇る太陽》、阿弥陀佛を、すべての生きとし生けるものを救いとる《沈む太陽》として位置づけ、その世界観は、Einsteinや $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ 理論などを包含する現代宇宙物理学をも包括する宇宙論に匹敵すると考えて、ユング心理学を超克したのである。

<索引用語：ユング心理学、縁起律、因果律、華嚴経、毘盧遮那佛>

はじめに

このタイトルは本シンポジウムの企画者・埼玉医大豊嶋良一教授²⁴からいただいた。しかも、本・第112回大会・会長の中山和彦慈恵医大教授の「会長企画シンポジウム」の劈頭でもある。大変に光栄なことである。

ユング心理学 (Analytische Psychologie, Analytical Psychology)⁹とは、1900年にスイスのバーゼル大学を卒業し、その年の12月からチューリヒ大学のBleuler, E.教授 (1857~1939)の助手として、精神科医となり、没するまでの60年間

に、Jung, C. G. (1875~1961)が打ち樹てた理論体系とその実践の学である。

しかし、著者のみるところ、西洋でも、樹立者Jung自身を乗り越えていく仕事をしえたのは、ほんの一握りにすぎない。ましてや日本でも同様で、著者の目に適う学者はNeuman, E., Guggenbühl-Craig, A.⁵, Kalf, D. M.¹¹, Spiegelman, M., Meier, C. A., Hillman, J., Giegerich, W., 河合隼雄、著者と実に数人にすぎない。

本稿は、本来なら、Jung自身が立脚したスイス中世の医師Theophrastus Hohenheim Paracelsus

(1493～1541)の錬金術(Alchymie)にかかわる部分や、無意識概念の先鞭をつけた Janet, P. (1859～1947)の tension psychologique の概念から始めて、Freud, S.(1856～1939)の Libido の概念の拡張を、その症状論的・統計学的、つまり、今、流行りの DSM-5 や、evidence based medicine などではなく、もっと、本格的な科学的・哲学的・歴史的考察から始めたいのだが、紙幅が限られているので、それらについては省く。

I. Jung の日本導入

Jung の日本導入を、著者は3期に別けて考えている。

それは、第1期：黎明期、第2期：導入期、第3期：河合隼雄先生以降、という3期で、①黎明期は *Wandlung der Libido* (1912)、中村古峽により「生命力の発展」として翻訳されたが、なんと、それは、《世界大思想全集》第33巻(春秋社、1931)で世に出た⁷⁾。②導入期は、*Seelenprobleme der Gegenwart* (1931)、高橋義孝らの翻訳で「人生の午後三時」などとして、ユング選集(日本教文社、1954)に収載された⁸⁾。このときは、翻訳・紹介した人々が臨床家ではなかったために、主として文化論的なものが多かった。③積極導入期は、河合による『ユング心理学入門』¹²⁾(これは、氏の留学中スイスで書かれたものである)以降からで、ここに至って、Jung の全体像が移され始めたと言ってよい。

先にふれたように、Jung や Freud, S. の日本導入の黎明は、いずれも、中村古峽による翻訳であったが、彼は千葉で開業し、臨床にもかかわっており、例えば、昭和12年には、あの中原中也が彼の病院に入院している²⁰⁾。

中村の訳文は、《世界大思想全集》に載り、Jung は第33巻に、Saint-Simon と Galileo-Galilei とともに、*Wandlung der Libido* (1912)の翻訳が紹介され、Freud は第16巻で、Schopenhauer とともに紹介されて *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse* (1917)の翻訳であった⁴⁾。

II. Jung の日本導入以後

さて、1967年以降の河合まで跳ぶことにするが、その論考は、とても斬新で素晴らしく、臨床心理学のみならず、日本文化論の領域にまで及んだが、そのすべての論考の原点は、ユング全集の英語版に基づいており、Jung のドイツ語ないし、フランス語論文には基づかず、英訳ないしは、原文が英文のものに限られていた。しかし、そんなことよりも、河合の偉さは、他の内外のほとんどのユング派学者たちがしている Jung の epigonen (επιγονοι) 的な、つまり、彼の概念への当て嵌めごっこなどではなく、全く、独自の、自分自身の考えで進めていることであり、特に、『明恵 夢を生きる』¹³⁾や、『昔話と日本人の心』¹⁴⁾、『とりかへばや、男と女』¹⁵⁾など、いわば、彼のいう《私の心理学》において、Jung を凌駕している諸点があることだ。それらは、まさしく、Jung の発想から、さらに飛躍・深化していくものであったが、残念ながら、心理学あるいは文明論の分野にとどまり、精神医学や、著者のいう、本来の科学的思考の延長上には行っていない。

III. さて、著者は、今まで、何をしてきたか？

著者は、1967年に精神科医になって以来一貫して、精神療法の道を歩いてきたといえるが、当初は、まず、いわゆる絵画療法の実践であり、ほぼ同時的に、Kalf, D. M. の Sandspiel の翻訳『カルフ箱庭療法』¹¹⁾をはじめ、夢分析や箱庭療法などの知見をもとに、荻野恒一らと『人間学的精神療法』²¹⁾で、Binswanger, L.(1881～1966)や、Boss, M.(1903～1990)らの人間学的精神療法の導入・紹介に関与し、箱庭療法の実践などで、『少年期の心』³¹⁾を上梓して、広く、児童期の心理療法一般にも、精神療法を普及させてきた。本書は、つい先日、第25版を重ねて、10万部をはるかに凌駕して、医療・心理分野のみならず、広く、教育・司法・福祉分野などにも読まれている。

さて、話の焦点を著者自身の Jung 関係の仕事に絞れば、まず、Samuels, A., Shorter, B. & Fred, P. の *A Critical Dictionary of Jungian Analysis*

を、『ユング心理学辞典』²³⁾として翻訳出版するにおいては、原書の Samuels らの書にはないが、この分析心理学を日本に紹介するには、なくてはならない項目(例えば、後述する縁起律や、曼荼羅など)や豊富な図版を加え、また、Storr, A. の The Essential Jung を、『エセンシャル・ユング』²⁵⁾として訳出し、Jung の文章そのものを適宜読めるようにした原著のよさをそのまま踏襲して、Jung の全体像を掴める方法に加担したり、と、いろいろ工夫もしてきたし、Währ, G. のドイツ語版 Jung を『ユング』として訳出し²⁹⁾、Jung がヨーロッパではどんなふうにもみられているかを考え、一方で、すでに、随分前に、Kraepelin, E., Jaspers, K. や Tellembach, H. ら世界有数の精神医学者 22 人を取りあげた『現代精神病理学のエッセンス』¹⁾に、Jung 自身の「統合失調論」を訳して、Jung を正当に位置づけ、かつ、自験例を加えて紹介したのだった。

また、1982 年に、スイスのツオリコンで国際箱庭療法学会 (ISST) を設立し、河合隼雄先生ともども、その Foundergroup 12 人の 1 人となり、延々、現在に至っている。つい先日、ドイツ箱庭療法学会 (DSST) から送ってきた、学会誌 Sandspiel-Therapie (私は、その Beirat 編集参与でもある) に、久しぶりに、著者の独文エッセーも載った³⁷⁾。

IV. 世界精神医学会 (WPA) 横浜大会

2002 年、横浜で、わが日本精神神経学会の親学会である、世界精神医学会 (WPA) が、アジアにおいて初めて開催されたとき、著者は、国際芸術療法学会の副会長をしていた関係で、急遽その大会の、芸術展示関係委員となり、これにかかわった。大会長は当時、東北大学の熊輝雄教授で、展示にかかわる部門の長は、WPA 日本側組織委員会委員長の東邦医大・鈴木二郎教授で、そのときのコンセプトのことで、世界精神医学会関係の出版担当者だった、Tomashoff, H. O. というオーストリアの精神科医と激論になり、結局、中止かも、となったところを、鈴木委員長に、「山中君、

悪いが、オーストリアへ行って説得してきてくれないか」と言われ、急遽、ウィーンに向けて機上の人となった。聖シュテファン大聖堂近くの Tomashoff のプラクシスに赴くと、まだ若い彼が、「前回も僕のコンセプトでやったので、今年もその延長でやりたい」と生意気な口を利く。実は、そのときの日本における大会全体のコンセプトは《手をつなごう 心の世紀に》をテーマに、ちょうど、日本精神神経学会が、その年の 5 月に、これまで長年《精神分裂病》と呼ばれてきた《schizophrenia》の訳語を高木俊介氏の発案で《統合失調症》と変更したばかりで、「患者への無用な差別を撤廃」すべく活動を開始しており、その線上でのアイデアだった。Tomashoff の考えは《Art for Antistigma》のタイトルのもと「患者の示す異常な描画は、芸術家たちをも鼓舞する大切なもので、これを中心に展示したい」ということに集約できようが、私のコンセプトは、同じ《Art for Antistigma》の題のもとでも「セラピーにより、それを克服して行くプロセスこそが大切」というものであり、片や《異常性重視》此方《回復性重視》と真っ向から対立した。そういうことでしたいのなら「私としては、日本では、今回中止ということにする」つもりで、Tomashoff の病理一辺倒の路線を阻止しようとする、Tomashoff は、そこまで言うんなら、会長の Lopez-Ibor, J. マドリッド大学教授(生物学的精神医学・精神薬理学)に電話する、という。私は、「望むところだ」と受けて立つ。オーストリアとスペインを電話で結んで、著者にとっては、初めての国際電話会議の経験となった。両者が、それぞれの意向を伝えると会長は「2 つとも、やったらええじゃないか!」《You shall do it by doing both!》という鶴の一声。どうも芸術展示は、会長自らのご意向だったらしいことが了解された。ただちに日本に取って返し、このことを鈴木委員長に報告すると「ああ、よかった、実は、私もロペス会長の意向は聞いていて、どうなるか心配していたが、よくやった!」とお褒めの言葉。さっそく、展示の具体的方法論に取り掛かった²⁷⁾。

V. 華嚴経 (महावैपुल्यबुद्धावतंसकसूत्र) とのかかわり

私は、2008年8月、パリ郊外ベレバでの、第2回国際華嚴経学会に招かれた²⁸⁾。華嚴経 (महावैपुल्यबुद्धावतंसकसूत्र : Buddhavatamsak8-Nama-Maha-Vaipulya-Sutra) とは、「大方廣佛華嚴経 (Hua Yen Ching)」と呼ばれる初期仏典で、中国語訳はあるが、本経全巻の原典は残念ながら残っていない(「十地品・入法界品」などのサンスクリット断片はある)²⁾。

この学会への出席は、本来は、華嚴宗の僧である明恵の夢を分析して『明恵、夢を生きる』¹³⁾を書いた河合先生が招聘されたのだったが、文化庁長官としてのご多忙の中で急逝されてしまったので、そののち、いろんな経緯の後、著者が招かれることとなり、比地で話をするようになった。著者は、まず当初、華嚴経など読んだことがなかったので、強く固辞したが、結局入れられず、ところが、偶然が重なって東大寺の華嚴経60巻の展覧以後、このお経に深くふれ、つまり半年間、華嚴経60巻をひたすら写経することとなった(これも後述の縁起律である)²²⁾。

よって、明恵のいた高山寺に赴き、座禅を組み、漢詩をものし、中国語訳されている《六十華嚴》を、ひたすら写経することによって(「それが正解だった!」と言われたのは中井久夫神戸大学名誉教授)、身読した華嚴経の極意を、箱庭表現をもって表現して、「深層心理学から見た華嚴宇宙 (Avatamsaka-sutra-universe from the view point of Depth Psychology)」という発表をしたが、著者にとっては、これはまさに、メイン・テーマたる「東洋的叡知と精神療法」が融合し変容する体験に基づくものであり、実に、重要な契機となった。

それらの一部は、例えば、「一即一切一切即一」「事事無碍、理理無碍、理事無碍」という華嚴思想の究極到達点から、箱庭表現としては、大宇宙 (macrocosmos) の実相と、存在の根源としての小宇宙 (microcosmos) を、《自己と宇宙の対比》としてとらえ、生成の根源としての毘盧舍那 (Vairocana) 《大日如来》と、輪廻と救済の象徴として

の無量壽佛 (Amitayus) をともに、《抽象佛》として理解し、宇宙全体と自己の全体とを、華嚴経思想の極値としての対応物としてとらえたものを、左に毘盧舍那佛 (ヴァイローチャナ, Vairocana), 右に阿弥陀佛 (アミターブハ, Amitabha) を据えて、彼岸正面にエジプトの死の神アヌビス、それに対して、此岸中央に、地藏菩薩クシティ・ガルバ (क्षितिर्गर्भः : Kṣiti garbha) を配して、微妙な均衡をとり、周囲に、善財童子が訊いて廻ったという53人の善智識を配し、真ん中・中央の須弥山に、空飛ぶ円盤を配して、その上に、私の自己像たる針鼠をとまらせた。ヴァイローチャナとは、万物生成の根源たる燦然と赤く輝く「昇る太陽」のイメージで、アミターブハとは、青々と輝くすべて救済のイメージたる「沈む太陽」だと捉えてのことだった³⁵⁾。

元来、国際表現病理学会 (SIPE) として、表現のうちの「病理」だけを論じていた国際表現病理学会の名称を、国際表現病理・芸術療法学会 (SIPE-AT) と、「治療」をきちんと据えた学会へと変貌させたのは、著者の提案による。また、その学会がポルトガルのリスボンで開催されたときは、Jakab, I. ハーバード大学教授に最後にまみえた会であり、その際、著者は、アメリカの Naumburug, M. 女史の Scribble や、イギリスの Winnicott, D. W. 博士の Squiggle などから想を得て、私の発案したコラージュを加味した交互ぐるぐる描き投影・物語統合法 (Mutual Scribble Story Making with Collage : MSSM+C) を高齢者に用いた事例を出したが、Jakab 教授から、「この方法は、高齢者にとっても、とてもいい方法ね」とはなほだしく賞賛された。

本邦では、岸本寛史君が独自に編者となって、著者の選集6巻を編んでくれた¹⁷⁾。大変に嬉しいことであつたが、あれは、2001年から2004年までの仕事であつて、さらにすでに12年を経ているので、そろそろ、続巻が待ち遠しいころである。また、同じく、彼との共同の仕事で、『コッホの「バウムテスト第3版」を読む』³⁶⁾というバウムテストの根本にかかわる対談も上梓された。

かくして、ISST や、SIPE-AT で、英語やドイツ語で発表し、エルンスト・クリス (Ernst Klis) 賞をハーバード大学において Jakab 教授から戴き、バスク賞をフランスのパリ大学において会長の Roux 博士から、カナダでのブリティッシュ・コロンビア大学での箱庭療法学会でファーザー・ラーベン賞をアメリカの Bradway, K. 教授から戴いた。

VI. 進化精神医学シンポジウム

かくして、昨年 (2015)、豊嶋良一教授の埼玉医大のご定年退官にあたって、川越で、シンポジウムをもった。豊嶋教授は、Stevens, A. らの『進化精神医学』を訳出され²⁴⁾、本特集の基底を作ってくださいました。

VII. そこで、著者の考えは…

まず、Jung の Syntonizität について、河合隼雄師は、周知のように、『共時性』と訳された。しかし、私は、『縁起律』と訳した³³⁾(これは、一般の日常語の中では、普通『ご縁で』と言われている生起の理論的内実)。仏教の『縁起論』とも一部かかわるが、それは、『因果論をも内包』しており、それとは、全く、独立したものである。つまり、『因果論』(Kausalität) と同格の、全く、別個の理論体系であり、いわば、Einstein, A. の『相対性理論』の Newton, I. の『古典力学体系』との対比に匹敵する理論体系なのだ。

VIII. 無意識的身体心像

著者の臨床上発見したもので、とりわけ重要なものに、『無意識的身体心像 (*unbewusste Leib Bilder*)』というのがある³⁴⁾。これは、本来見えない、身体内に起こっている現象を、イメージとして語ること、である。

この発見については、岸本らが、2014 年、南アフリカの国際学会で発表してくれている。それは、一言で言ってしまうと、「肺がんの脳転移を、イメージ化した語り」だったが、私は、ただちに、X線写真を撮り、転移の事実を発見したのだった。

あるいは、バウムテストで、『漏斗状幹上開』を呈する中で、トポロジー数学から『メビウスの帯現象』を呈する表現を見つけ、『メビウスの木』と名づけ、これは、東大教授だった臺弘先生が『筒抜け』現象として指摘されていたものと同等であると、教授から絶賛を受けた。糖尿病患者 (diabetes mellitus' Kranke) のバウムテストに、私が哲学者・九鬼周造の『「いき」の構造』¹⁸⁾の乖離的対立の論から、『離接』と名づけた。

IX. 仏教的問題、特に、『観無量壽経』について

Freud のもとに赴いた古澤平作は、『観無量壽経』の前半の、『阿闍世コンプレックス』に目をつけたが、Jung は、後半の『十六想観』の方に目をつけ、『悟りの階梯』を『心理療法の深さ』の問題としたが、このことには、河合先生をはじめ、誰も注目していない。しかし、元来が門徒である著者には、このことは大きい。

しかし、Jung は、それ以上には、つまり、法然や親鸞には一言もふれていない。中国の善導・曇鸞以前の段階である。大拙のいうように仏教理解も表層にとどまっている²⁶⁾。しかし、キリスト教との比較において、親鸞は絶対的に必要である。

X. 親鸞と佛教的精神療法

著者の最初の精神医学の師は、岸本謙一教授であるが、先生は、Freud や Frankl, V. E. までで、Jung や Binswanger には、ふれていない。しかし、親鸞には、はなはだしく関心を寄せられ、先生の『仏教的精神療法』は、明らかに、清沢満之・多田鼎を経て、親鸞の『教行信証』をベースに敷いておられた^{16,32)}。それとは独立して、著者は、花田正夫という、京大・哲学科と岡山医大に学んだ在家信徒の師に教えを受け、親鸞の思想に深く共鳴していた。花田の師・池山栄吉が独訳した TANNISHO, das Büchlein vom Bedauerun des Abweichenden Glaubens⁶⁾が、大きな気づきを用意してくれた。よって、著者の Jung・親鸞理解は、その層におけるアマルガムである。

XI. Black Hole 理論から Extraterrestrial Life (地球外生命) の探究まで

これまでに掲げたいくつかのことは、一見、たいしたことはないと思われるであろうが、現今問題となっている、つい先ごろの100年ぶりに Einstein の《波動理論》¹⁹⁾の証明や Laplace, P. S. に始まり, Gamow, G. らの $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ 理論などから, アメリカの物理学者 Wheeler, J. A. が1967年に命名した, 《Black Hole 理論》は, Coles, P. が “Cosmology”²³⁾に説くごとく, まさに, Newton から Einstein に至る, 現代宇宙物理学の王道であり, また, 一方, 《生命の起源》や, Ward, P. & Kirshvink, J. の “A New History of Life”³⁰⁾などの生物学系の諸知見をみても, 《地球外生命の存在の可能性》に迫る生命学の最先端とともに, とても興味深い事実なのだ。

XII. 親鸞と「教行信証」

親鸞は, 鎌倉時代において, 当時の民衆を, 魂の次元において救済するべく, 政府権力や朝廷の弾圧や誹謗などにも屈せず, 《顯浄土眞實教行證文類: 教行信証》を最晩年の90歳に至るまで, 刻苦勉強, 完成させることによって, 《念仏》という, 易行門を確立し, それを可能とした。

XIII. Jung の『赤の書』

Jung に関する最新のニュースは, 彼の『赤の書』と呼ばれる書物に関してである。これを, ほとんど毎日, あの特徴的な, くねくねした髭のいっばいついた, いかにも気取ったドイツ花文字で, Jung が手書きで書いていた大判のノートなのであるが, 伝説的な言い方ですれば, 彼の死後, 2009年までの50年間, スイスの銀行の金庫にしまわれていたとのことである。それを見つげ出した Shamdasani, S. (1962~) は, その本に解説をつけ, ドイツ語・英語・日本語などで, 世界ほぼ同時発売という形で, しかも, 1冊30,000円を越すものであった。ここでは, 著者の見つけたある重大な間違いについてのみ, 記すことにする。彼はこの仕事で, 現在, ロンドン大学教授となったが,

彼は, ここで, 重大な間違いを犯した。それは, 邦訳本¹⁰⁾では, p.301の下欄の Shamdasani のつけた注釈である。注釈をつけた彼自身が間違えたので, 当然ながら, 英語版もドイツ語版も, 邦語版も, また, これから出るであろう, いかなる国語の版も, いわば, 世界中がすべて間違っているので, きちんと指摘しておきたい。それは, 彼が, サンスクリット語を読めないことから起こった単純ミスである。ここは, 内容にはふれず (それについては, 箱庭療法学会誌の書評に書いておいた), 何を何と間違えたかについてのみ記しておく。それは, 《アタルヴァ・ヴェーダ》(अथर्ववेद: Atharva-veda, 阿達婆吠陀) という, サンスクリット語で書かれた, 現存する世界最古の医学書といわれるものであるが, アーリア系の知識に土着のドラヴィダ族の知識を加え集大成したもので, 主に呪文が書かれていることが強調されているため, 密教の源流となった文献ともみなされることがある。その4篇4章1節, を, 4篇1章4節と取り違えたために起こった単純ミスであるが, 私がこれを偶然見つけたのは, 最初読んだときに, 全く文脈が通じず, 訳がわからなかったので, 友人のサンスクリット学者に訊いたところ, この事実が判明したのであった。

XIV. 著者なりの一応の結論

かくして, 著者は, これらを通して, Jung が追究した《たましい》の心理学を, 精神医学の実践として歩み, かつ, 探求してきて, 一応, 以下の結論に達した。

- ①Jung は, 西欧世界においては傑出して, 東洋思想にも理解を示し, 彼なりの世界観の上で, 精神医学を追究した稀有の学者である。
- ②しかし, 彼の東洋理解, 特に仏教理解においては, 鈴木大拙がいうように, まだ表層にとどまっていた。
- ③そこで河合隼雄の果たした役割は偉大であった。
- ④その河合を土台にさせてもらって, 私はさらに深層に深く分け入り, 毘盧遮那佛と, 阿弥陀佛を抽象佛として位置づけ,

- ⑤「華嚴宇宙」を経験して、外界の延長としての macrocosmos と、内界の深まりとしての microcosmos を、統合的に把握することが可能となった。
- ⑥その考えは、Einstein や Gamow らの説く現代宇宙観に通ずる。
- ⑦さらに、親鸞の体験をベースに、それを深化させ、
- ⑧心は、《たましい》の次元において把握可能となった、のである。

なお、本論文に関連して開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 相場 均, 荻野恒一監修: 現代精神病理学のエッセンス. ベリかん社, 東京, 1979
- 2) 荒牧典俊訳注: 十地経 (大乘仏典 8). 中公文庫, 東京, 2003
- 3) Coles, P.: Cosmology: A Very Short Introduction. Oxford University Press, Oxford, 2001
- 4) Freud, S.: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, 1917 (中村古峯訳: 精神分析入門. 世界大思想全集, 第 16 卷. 春秋社, 東京, 1932)
- 5) Guggenbühl-Craig, A.: Die närrischen Alten. Schweizer Spiegel, Zürich, 1986 (山中康裕, 監訳: 老愚者考. 新曜社, 2007)
- 6) Ikeyama, E.: TANNISHO, das Büchelein vom Bedauern des Abweichen Glaubens. Risosha, Tokyo, 1965
- 7) Jung, C. G.: Wandlung der Libido, 1912 (中村古峯訳: 生命力の発展. 世界大思想全集, 第 33 卷. 春秋社, 東京, 1931)
- 8) Jung, C. G.: Seelenprobleme der Gegenwart. 1931 (高橋義孝, 江野専次郎訳: 現代人のたましい (ユング著作集 2). 日本教文社, 東京, 1954)
- 9) Jung, C. G.: General Index to the Collected Works of C. G. Jung. Bollingen Series, xx. Princeton University Press, Princeton, 1979
- 10) Jung, C. G., Introduction and Notes by Shamasani, S.: The Red Book (Philemon Series). W. W. Norton & Company, New York, 2009 (河合俊雄監訳: ユング赤の書. 創元社, 大阪, 2010)
- 11) Kalf, D. M.: Sandspiel. Rasher, Zurich, 1966 (山中康裕監訳: カルフ箱庭療法. 誠信書房, 東京, 1972)
- 12) 河合隼雄: ユング心理学入門. 培風館, 東京, 1967
- 13) 河合隼雄: 明恵 夢を生きる. 京都松柏社, 京都, 1978
- 14) 河合隼雄: 昔話と日本人の心. 岩波書店, 東京, 1982
- 15) 河合隼雄: とりかへばや, 男と女. 新潮社, 東京, 2008
- 16) Kishimoto, K., Yamanaka, Y.: Zen Buddhism and Psychotherapy: A Commentary on Yasenkanna by Zen Master Hakuin. Psychologia, 30; 113-125, 1987
- 17) 岸本寛史編: 山中康裕著作集 (全 6 巻) — ①たましいの窓, ②たましいの視点, ③たましいの深み, ④たましいと癒し, ⑤たましいの形, ⑥たましいの顕現. 岩崎学術出版社, 東京, 2001-2004
- 18) 九鬼周造: 「いき」の構造. 岩波書店, 東京, 1930 (岩波文庫, 1979)
- 19) Lacayo, R.: Albert Einstein: The Enduring Legacy of a Modernrn Genius. TIME, New York, 2011
- 20) 中原中也: 中原中也の世界. 中原中也記念館, 山口, 2014
- 21) 荻野恒一, 大橋一恵, 山中康裕: 人間学的精神療法. 文光堂, 東京, 1977
- 22) 六十華嚴. 東晉天竺三藏佛跋陀羅訳「大方廣佛華嚴經」. 東大寺御宝, 昭和納経展. 日本書芸院, 大阪, 2008
- 23) Samuels, A., Shorter, B., Fred, P.: A Critycal Dictionary of Jungian Analysis. Routlige & Kegan Paul, London, 1986 (山中康裕監訳, 垂谷茂弘, 濱野清志訳: ユング心理学辞典. 創元社, 大阪, 1993)
- 24) Stevens, A., Scott, J.: Evolutionary Psychiatry. Psychology Press, Oxford, 2000 (豊嶋良一監訳: 進化精神医学. 世論時報社, 東京, 2011)
- 25) Storr, A.: The Essential Jung. Princeton University Press, Princeton, 1983 (山中康裕監訳: エッセンシャル・ユング. 創元社, 大阪, 1997)
- 26) Suzuki, D. T.: What is Zen, Perennial Library. Harper & Row, London, 1971
- 27) Tomashoff, H. O., Carbonell, C., Yamanaka, Y.: Human Art Project, Art for Antistigma. Schattauer, Stuttgart, New York, 2003
- 28) 上田健次郎: パリの第 2 回国際華嚴経学会に出席して. 中外日報, 2008 年 8 月 21 日, p.4

- 29) Wehr, G. : C. G. Jung, rowohlts monographien, Rowohlt Taschenbuch. Verlag GmbH, Reinbek, 1982 (山中康裕, 藤原三枝子訳: ユング. 理想社, 千葉, 1987)
- 30) Ward, P., Kirshvink, J. : A New History of Life—the Radical New Discoveries about the Origins and Evolution of Life on Earth. Bloomsbury Press, New York, 2015
- 31) 山中康裕: 少年期の心. 中公新書, 東京, 1978
- 32) Yamanaka, Y. : Buddhism and Psychotherapy. *Psychologia*, 28 ; 77-89, 1985
- 33) 山中康裕: 縁起律について. 身体像とこころの癒し—三好暁光教授退官記念論文集 (山中康裕, 岡田康伸編). 岩崎学術出版社, 東京, 1994
- 34) 山中康裕: 老いのソウロロジー(魂学). 有斐閣, 東京, 1991 (老いの魂学. ちくま学芸文庫, 東京, 1998)
- 35) 山中康裕: 深層心理学から見た華嚴経 (HUA YEN CHING) [大方広佛華嚴経 (*Buddhavatamsakanama-Maha-Vaipulya-Sutra*)] の宇宙. ユングと曼荼羅 (ユング心理学研究, 第2巻, 日本ユング心理学会編). 創元社, 大阪, 2010
- 36) 山中康裕, 岸本寛史: コッホの「バウムテスト第3版」を読む. 創元社, 大阪, 2011
- 37) Yamanaka, Y. : Die drei Dharmas und andere Erinnerungen an Dora Kalf, Sandspiel-Therapies. Heft, 40 ; 91-93, 2016

How Jungian Psychology Has Been Developed in Japan

Yasuhiro YAMANAKA

Kyoto Hermes Institute

Professor Emeritus, Kyoto University

Jungian Psychology was introduced to Japan in 1931 by Kokyo Nakamura for the first time in *Sekai Daishiso Zenshu* (“The Complete Works of Thoughts in the World”) vol. 33. (Shunjusha Publishing Company). Yoshitaka Takahashi and others made Jungian Psychology more accessible to the Japanese public in the mid-1950s although they did not succeed in full representation of the fundamental ideas of C. G. Jung. It was Hayao Kawai who truly understood those ideas and initiated the Jungian movements in Japan in 1967. In my opinion, however, there are hardly any Jungian Analysts who develop Jung’s ideas further enough to reach a new awareness of the human psyche except a very few people such as Neumann, E., and Guggenbühl-Craig, A., Kalf, D. M., Spiegelman, M., Meier, C. A. and Hillman, J., Giegerich, W, in the West and H. Kawai and me in Japan. Kawai develops and deepens Jungian thoughts to a certain extent in his book, *The Buddhist Priest Myoe : A Life of Dreams* (Shohakusha Publishing Company), while his understanding of Buddhism does not exceed what D. T. Suzuki describes in his work, *An Introduction to Zen Buddhism*. That is to say the ideas of both Zen and Shin Buddhism are abstracted and assimilated in general Buddhism in his work, resulting in losing their unique features which could have been pursued further. Moreover, although Kawai translates Jung’s idea of Synchronizität to “kyoji-sei” (synchronicity), I claim that “engi-ritsu” (the

pratitya-samutpada principle) would be a more appropriate term to reflect the original concept as it would imply the opposite principle to “inga-ritsu” (the causal principle). It should be noted that the pratitya-samutpada principle is different from the Buddhist concept of pratitya-samutpada which includes causality. In addition I transcribed the Avatamsaka sutra, which originated in India and was developed in China. I also attended to the 2nd international conference featuring the Avatamsaka sutra at Belesbat on the outskirts of Paris. Eventually I have reached an idea that when combined with the concept of the pratitya-samutpada principle, the Avatamsaka sutra could be considered as a product of Eastern wisdom which would provide an insight beyond Jung. What was originally comprehended by Gautama Buddha was crystallised in abstract images of Amitabha and Vairocana in China during the second and fourth centuries. Amitabha is a celestial buddha that Shinran, the founder of Shin Buddhism, established his own understanding of in his school whereas Vairocana is a celestial buddha that appears in the Avatamsaka sutra. Vairocana could be taken as an image of the “rising sun”, the creator of all things, while Amitabha as the “sinking sun”, the saviour of all creatures. This picture of psychological cosmology gives a new perspective on the human psyche that would succeed Jungian Psychology. I believe this unique conception is equivalent to the findings in modern physical cosmology, such as Einstein’s theories and the Alpha-Beta-Gamow paper, which provided a new understanding of the universe.

<Author’s abstract>

<**Keywords** : Jungian Psychology, Pratitya-samutpada Principle, Causal Principle, Avatamsaka sutra, Vairocana>
